

# イナズマイレブン～月 の章～

ふわにゃん二世

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

雷門中サッカー部は部員も少なく試合も出来ない弱小サッカー部であった。

そんなある日、帝国学園との練習試合が彼らの元に入ってきた。そしてその雷門中に二人の転校生が来ていた。

# 目次

白金美月、三年生さ

1



# 白金美月、三年生さ

イナズマイレブン

ー時はフットボールフロンティア準決勝ー

『さあ、木戸川清修中对松陽中の試合、1対1、どちら一步も引かない！ おおっと、ここで木戸川清修がボールを奪ったあ!!?』

「フアイアトルネード!!?」

業火を纏った強力なシュートが松陽のゴールへと突き刺さった。

『決まったああああああ!!? 木戸川清修勝ち越し!!? そしてここで試合終了!!?』

木戸川清修中、決勝進出だあ!!?』

会場は割れんばかりの大歓声に包まれた。勝利した木戸川清修の選手らとは対照的に松陽中の選手らは膝から崩折れ、項垂れるものまでいた。

「くそっ!!? これで俺達も終わりかよ」

「先輩……………」

「来年は絶対に優勝してくれよな、美月」

「はいっ………はいっ!!?」

先を走る者が後に続く者達に託す、先輩達の想いを来年こそは。

そう誓う白金美月の紅い目からは先ほどまで溜め込んでいた涙が一気に溢れ出ていた。

しかし美月がこの思いを受け継ぐことはできなかつた。

\*

―雷門中―

それなりに長い歴史のある学校で、通う生徒も個性溢れていた。桜が散り春の名残を惜しむ空をよそにデジタル音の鐘が校内に響いていた。

「はい。今日の授業は終わりです。部活のない生徒は早く帰るようにしてください」

授業終了を告げる鐘が鳴り、それを合図に鞆に教科書を仕舞い帰宅の途につく者、部活動の為に部室へと走る者、ただ教室に残り話に花を咲かせる者、それぞれが思いのままに放課後を過ごしていた。

「さて、今日は帰ろうかな」

美月は雷門中に転校したのだった。両親の仕事の影響だが、それを聞かされた時には驚きの他に似合う感情が彼の中にはなかつた。

転校して来た彼に勿論部活動に所属はしておらず、あの様な形でかつての仲間と離れてしまい、その上もう三年生。今更部活をやるかどうかに迷っていた。

(前はサッカー部だったけど、ここつてサッカー部あるのかなあ………かと言って他の部活をやる気も無いし)

大人しく受験勉強でもするかな、と校舎を出て考えながら歩いていた美月。恐らくあまり周りを見ていなかったのだろう。サッカーボールを持つて爆走する少年に気付かなかった。

「だあああああぶなああああああい!!?」

そして、

「へ?あだつ!!?」

顔を向けた瞬間に、互いに顔面から思いつきり激突してしまった。周囲が唾然とする中、美月は額をさすりながら起き上がる。

「す、すまない大丈夫か?」

「い、いやこつちこそすいません」

目の前で額を抑えているオレンジのバンダナの少年、円堂守はサッカーボールにユニフォームと明らかにサッカー部といった格好である。

「えっと、君って………」

「円堂君！」

「サッカー部？」と聞こうとしたところに遮るように女子の声が聞こえて来た。淡いオレンジ色のジャージを着た女子が走って来た。

「ご、ごめんなさい、大丈夫ですか？」

「ああいや、大丈夫だよ。俺もボーツとしてたし気にしないでくれ。ところで君らはサッカー部？」

「はい、でも人数もないんで試合も出来てないんですけど」

「ふーん、この学校ってサッカー部あったのか……………」

「え？」

月夜の言葉に円堂とジャージの少女、木野秋は目を丸くした。雷門中サッカー部は人数も集まらず周りからも馬鹿にされる事の多い今、そういう反応はある意味珍しいとも言えた。木野はサッカー部の事情を美月に説明した。

事情を知った美月は苦笑いを浮かべるほかなかった。

「……………ああいやすまん。今日転校したばかりだしグラウンドにもサッカー部の姿も見えなかったしね」

「そうなんですか、どうりで……………」

「それにしても、碌に設備も環境もなく、試合も出来ない状況でもサッカー部に入るなん



てね。サッカー好きなのかい？」

「ああ!!? 大好きさ!!?」

即答だった。円堂の眼はサッカーへの思いが溢れていた。

―面白い―素直にそう思った。

「じゃあそろそろいくよ。俺は三年の白金美月、何かあれば声を掛けてくれ、一応前の学校ではサッカー部だったからね」

それじゃあと月夜は駆け足ながら足早に去っていった。

「なんか、いい人だったね」

「ああ、それに元サッカー部だって……………サッカー部?」

「ええええええええ!!?」

「サッカー部に勧誘すればよかった!」と円堂と秋が気付いた時には美月はもう姿を消していた。

\*

「雷門中ってサッカー部あったのか。てつきり無いもんだと思ってたから驚いたな」

そう思いながら美月は、円堂のことを思い出していた。

「……………いい眼をしてたな、彼」

サッカーを語る時の眼、アレは心の底からサッカーを愛している人間にしか出せない

輝きだった。正に真のサッカーバカなのだろう。

一緒にサッカーをやってみよう。我ながら単純な奴だと感じた美月だが、身体が動きたくてうずうずとしていた。

「……………ちよつと走つてくるかな」

暇つぶしにと買った『高校受験入門』と書かれた参考書を閉じると、ジャージに着替え、家を飛び出した。

\*

雷門町のとある山、稲妻をシンボルとした鉄塔が目印の山であった。自宅を飛び出した美月は取り敢えずあそこまで走ろうと飛び出していったのだ。

辺りはすっかりと夕暮れとなっていた。地平線の彼方へと沈んでいく太陽がせめてもの名残をと残していくかの様な紅の空であった。

走る足音と吐息が小気味いいリズムが身体の調子の良さを感じさせた。

だいぶ距離を走った。額から流れ出る汗が鬱陶しさを感じる。

「転校してからあんまり走ってなかったけれど、やっぱり体力は落ちてるな」

スポーツ選手は1日練習をサボるとその感覚を取り戻すためには三日の練習が必要だと良く言うが、サッカーを一ヶ月近く休んでいた美月は十分に体力が落ちていた。

「サッカー部、雷門中にはないって聞いていたから中学では諦めようと思ってただけ

どな」

去年の敗北、雪辱を果たすと誓った仲間との約束も果たせず、サッカーへの想いが霞んで来ていた。

「円堂……………守か……………」

彼を思い出し、ふっと笑みを浮かべ走り出した。

\*

河川敷にあるサッカーグラウンドここでは小学生のサッカーチーム、稲妻KFCが練習をしていたがそこに円堂も混ざってサッカーをしていた。

「よしっ、まこ、そこでシュートだ!!?」

「いっくよーえい」

KFCのキャプテンを務める少女のまこのシュートは一直線にゴールへと向かって行く。正面から右に少し逸れたシュートを円堂は正面に入りガツチリとキャッチする。

「いいシュートだ!」

「えー、また円堂ちゃんに止められたよ」

「よし、もういっちょだよ!」

円堂は彼らにサッカーを教えていた。学校では試合も出来ないサッカー部に貸すグラウンドはないと練習も出来ず、部員達もやる気なし。

それでも円堂はこうしてサッカーを続けていた。

「ふふっ、円堂君楽しそう」

一緒に付いて来たマネージャーの秋。確かに円堂は楽しそうだが、やはり物足りなさはあるだろうとも理解していた。

「よし今度は俺だ！必殺シュート」

と蹴ったボールが不幸にも近くを通りかかった不良の近くを通った。そしてそれを踏んだ不良は盛大にすっ転んだ。

「つてーな!!? 誰だ!!?」

イラついた不良は起き上がると怒鳴った。子供達は完全に萎縮してしまった。円堂は恐る恐るその不良に近づいていった。

「すいませんボールを、ぐっ!!?」

「きや!!? 円堂君!!?」

秋が小さな悲鳴をあげる。不良の膝が円堂の腹に入った。円堂は呻きながら崩折れる。

「なんだあお前雷門中のサッカー部か、部員もいねえからこんなところでガキどもの球拾いをやってるってか? しょうがねえ、この安井様がお手本を見せてやるよ。あらよつと」

不良の安井の不恰好ながら力任せのシユートはベンチ脇でドリンクを飲んでいたまことに向かっていった。

円堂は避ける!!?と叫び、秋は咄嗟に目を塞いでいた。

「ツ!!?」

しかしそのボールは土手から走りこんできた髪を逆立てた白みがかつた金髪の男が蹴り返し、安井の顔面へと吸い込まれた。

「安井さん! てめえ……………」

安井の後ろにいた手下は蹴り返した男を睨んだがその男の鋭い眼光に怯み

「お、覚えてやがれ」

と捨て台詞の残し逃げていった。

「ありがとうお兄ちゃん」

まこが助けられた男にお礼を言うとその男はふっと笑みを浮かべるとその場を去ろうとした。

「なあ! 今のすつごいシユートだったよ、君、どこのサッカー部?」

そのシユートに感動した円堂はすぐにその男に詰め寄った。

だがその男の表情はサッカーと聞くと冷め。

「悪いな、サッカーはもう辞めたんだ」

そう言い残し足早に去っていった。

\*

やがて子供達はそれぞれ家路についた。円堂はボールを見つめるさっきの男の事を考えていた。

「サツカーを辞めたっていつてたけどあんなシユート……勿体無いな」

一人円堂はボールとボールを軽く投げ、ボールを蹴ったが、力が入り過ぎて、しかもバランスを崩したキツクは大きくスライスしてしまった。

しかもボールの先にはランニングをしている人がいるではないか。

「しまった！危ない!!？」

ランニングをしていた、美月は円堂の声に顔を上げると突如頭上から自分に迫って来っていたボールを、

「よつと」

軽々とトラップした。

「え？」

数回、リズムカルにリフティングを行い、足を止める。

「凄げえ、あの人上手いや」

円堂は少しのプレーだが咄嗟のトラップからのリフティングまでの美月の動きに目

を奪われていた。

「いつまでボサツとしてるつもりだい？　ホラ、蹴り返すついでにシュートするから止めて見なよ」

「よーし、来い!!？」

美月はボールを上空に蹴り上げた。そして地面を蹴り、跳んだ。

「久し振りだからね、本気では蹴らないからさ」

空中でのボレーキックは空気を切り裂き、一直線にゴールへと、円堂へと向かっていった。

「だあつ!!？」

なんとか反応できた円堂は両手で受け止める。受け止めた手の中で強烈な回転の掛かったボールが手から逃げようと暴れ、力ついたボールが円堂の手の中に収まった。

円堂はボールが手から離すといまだに痺れる掌をじつと見る。

「すげえ、まだ手が痺れてる。こんなシュートが打てるなんて……………」

うおー!!？すげー!!？と脇芽を憚らずに叫ぶ円堂。その姿に美月も笑ってしまう。

「ふふ、あはははは」

面白い、単純にそう思った。あれ程サッカーに真つ直ぐに、馬鹿になれる人間などそうはいない。

ひとしきり笑うと、柔らかく笑みを浮かべる。

「やっぱり、サッカーは辞められないな」

どんな事があってもやはり自分はサッカーを捨てられない。捨てたつもりになっても自分にはサッカーしかないようだ。

(これって、いわゆる運命っていうのかな)

「スゴイよ！ さっきのシュート、俺あんなシュート撃てるんだ」

「はは、そんなに褒められるものじゃないさ。これぐらいは練習すれば撃てるようになる」

興奮する円堂とは対照的にこにことしながらも淡々と話す美月。

あつと円堂は思い出したようにかしくまった。

「あの、サッカー「いいよ」部に……………え？」

「だから、サッカー部に入るよ。白金美月、三年生だけどよろしく」

スツと手を差し出した。

「いやったく!!？」

円堂は素直に喜んだ。